

Ridl.) はカーチス植物雑誌 t. 1532 に描かれていて、これに最も近いと思われるので、この系統に属するものであることは間違ないと信じられる。しかしマライのものは花被裂片は緑色で縁が白いので、紫花を開く台湾のものとはちがう上に、苞も巾広いので別物と思われる。花が紫色の点からは東ヒマラヤの *P. Bakeri* Hook. f. に似ているが、台湾のものは一そら全形が小さい。この類の決定的な結論は東南アジア全体の標本をもとにした再検討をしなければはっきりしない。また Hutchinson はこの属だけを *Peliosanthae* としてユリ科中の特別の族とするが、*Ophiopogon* とは花糸が合着するちがいがあるだけで、別の族にする根拠にとぼしい。何れにしても台湾にこの属が一つ追加されることは確実で、最終決定は総合的な研究にゆづり、取敢えず採集者に献名して発表する。終りに材料を恵まれた高木村氏、および筆者のために美事な図を描いて頂いた同大学森林学系、郭秋成氏に深謝する。

○カミソリグサという和名 (久内清孝) Kiyotaka HISUCHI: On another Japanese name for *Scirpus ternatanus*

昭和5年(1930)に中井さんのおともをして、小笠原島へいった。このときは、東大の定期採集旅行で、いまの前川教授が後期学生のときで、偶然堀川芳雄博士も広島の学生を引率して加わった。まことに古い話である。そのとき、父島で *Scirpus chinensis* Munro なるものをカミソリグサの和名でおぼえた。爾来この名が今まで私の頭に残っていて、他の地方から入手したこの植物を、いつもこの名で処理していた。おそらくこの採集に参加したものは、だれも記憶されている名だと思う。もっとも学名の方は規約上の関係から現在 *Scirpus ternatanus* Reinw. が用いられて、和名もその学名のものに与えられていたオオアブラガヤが用いられている。それはそれでよいのだが、私の記憶にある、カミソリグサという名は現行の新しい文献には見つからない。もともと、和名の異名だから、どうでもよいようなものだが、一度用いられたものがなくなると気になるので、東大で標本をしらべて見たら、中井さんの手記があった。それだけなら、いわゆる口つたえの名か手記名であるから、自然に消えてもよいことは当然であるが、しかし、文献に印刷されていることになると、一応異名の扱いをしてもよいことになるので、小笠原フロラに精通している津山尚博士に相談したところ、この名が印刷されている文献が出てきたが、いまではたやすく見られないものだからそれを記しておくのも無益だともいえないで、ここに拾っておく。すなわち、理学界 26 卷 5 号 p. 41 (1928) にのっている中井猛之進博士の小笠原島の植物(II)と小笠原島の植物概説 (Bulletin of the Biogeographical Society of Japan Vol. 1, No. 3, June, 1930) で、この他に東京營林局: 小笠原島国有林植物概観 (1929) p. 122 にあった。なにはともあれ、こんな刊行物に、こんな名が公表されたこともあったということだけ明らかにしておく。ここで、

私はこの名を起用しようというのではなく、一度はこんな和名が用いられたことのあったことを想起しようというのである。カミソリグサのおこりは、葉縁の鋸さのためけがをするところからきた方言であったと思う。

○高等植物分布資料 (57) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (57)

○オオヒゲナガカリヤスモドキ *Misanthus tinctorius* Hack. var. *intermedius* Ohwi 本州の多雪地帯の丘陵地に群生するが、これが信州西筑摩郡木祖村の鉢盛山へと南下している。横内氏が1966年8月25日に採集された。この山の西南に奈川の谷を隔てて、ヒメモチの南限である野麦峠がある。 (東京都立大学牧野標本館 水島 正美)

○コウキクサ *Lemna minor* L. 大滝末男氏によれば、北海道の他に、東京、大阪、四国などで知られているが、私は今年(1967年)3月玉名市内で採ったのを始め、6月までに熊本県北部の菊池川下流の平野部一帯で採集した。即ち現在までに荒尾市野原、玉名郡岱明町、横島村、玉名市内各所でかなり多く繁殖しているのをみている。県下の他の地域或いは隣接の筑後川下流域なども調査中なので、今後新らしい知見があればまとめて報告するつもりである。終りに御教示いただいた大滝氏に感謝する。

(熊本大学薬学部 浜田 善利)

□倉田 悟: 続樹木と方言 pp. i—iv, 1—213, 索引 1—10, pl. 4, 挿入写真 35, 地球出版, 1967, ₩750. 前著樹木と方言, 1962年に続くもので、著者が折々の旅行を通じて山村の人々と交流して得た植物とその土地の人々との関係を、隨筆風にまとめた短文または短文集, 38篇がおさめられている。著者の実見のほかに、各地の方言集、民俗誌も多く引用されていて、植物名の語源などについては慎重なアプローチを示している。この方面に关心のある人には必読の書である。 (津山 尚)

□清水大典: 山菜全科 A5, 350 pp. 原色図絵73個、線画135種、3. 8. 1967, 家の光社 ₩480. 米沢市立博物館学芸員である著者の作で、野生で山菜として食用に供するに適するもの135種を、その利用に適する季節の姿で写生してあるが、食べられないもので、食べられるものに似て誤り易いものも比較のため図説してある。その外、食べられるがあまり感心しないものは「本書で取り上げなかった山菜」という条下に、その名称だけを別記してある。表題のような本であるから、全部食用として利用し得るときの状態で写生されてるので、その点一般の図説とは趣を異にしていて、そこが著者の苦心したところで、またそれが著者のじまんであろう。なにはともあれ、山菜料理流行のこのごろ、重宝する人が少なくないだろう。山菜は方言で呼ばれるのが相當にあるので、そこに思いをよせて、各種ごとに方言、つまり地方名を拾録してあるのは、この類の本にはよい企てであった。たのまれてかいた本でないのはなによりである。 (久内 清孝)